

稲虫送り

稲の生長を祈り 虫を供養する 農のこころ

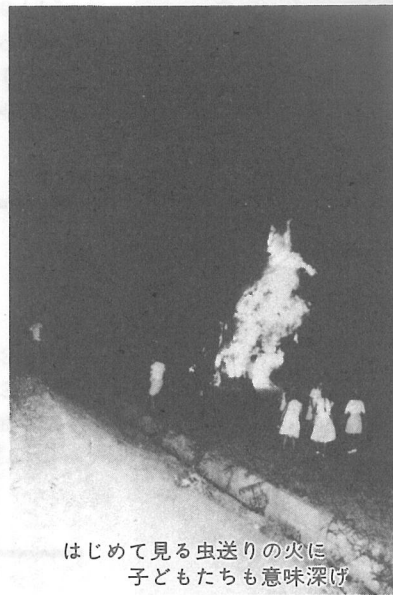
水田を耕して作ることが、弥生時代以降、近代に至るまでの日本の農村の基本的な姿でした。古くから稲作にかかわる農耕儀礼は数多く、出穂から稔りへの健全な生育を祈るものに、「稲虫送り」の行事がありました。

害虫を誘う

火のヤグラ

「三番草」の除草作業を終えた旧暦6月下旬、子どもたちが水田の傍らで火を焚き、稲の害虫を除いて豊作を祈るものでした。

この行事は、まず、男女児童または男児たちが、集落単位に家々から麦ワラ・荒縄・青竹などを集め、これを高く矢倉（ヤグラ）の形に積み上げます。夜に入ると、男児は松明をつくり、女兒は提灯を



はじめて見る虫送りの火に 子どもたちも意味深げ

手に集まり、行列をつくって田圃の害虫を誘い、麦ワラを矢倉まで行き、火を放って最終的に害虫を誘殺し稲の害虫をのがれるというものでした。

ツトコの中に

お礼とご馳走

私どもの幼いころ、かつての坂田地方（市場・於幾・寺方・曾根合）では、高さ6、7メートルもの矢倉を作るの

に、大体、3日間ほどかかりました。虫送りの当日、夕方になると家々では、お寺からいただいた「お札」と、お菓子・赤飯・うどん等を入れた「ツトコ」（ワラづと）を竹篋で結び、門脇に吊るすのが恒例でした。やがて、その竹篋はすべて矢倉の場所に集められるのですが、幼い私どもにとって、ツトコの中のご馳走は楽しみなものでした。あ



子どもたちに虫送りを見せたい.....この一心で若者の作業がつづいた

いま問われる 「稲の文化」

田圃を荒す減反政策、外圧による理不尽な自由化攻勢、さらには、稲作の「村」の変貌と崩壊など、日本の稲作をめぐる状況は日々悪化の一途をたどっています。このときこそ、もう一度、日本文化の基盤である「稲」について、国民一人ひとりが考えることが大切だと思います。そんな意味を込めて、虫送りの記憶を綴ってみました。（文化財審議委員・子安 広）

たりに夕闇が迫るころ、矢倉には火が放たれ、パチパチと燃え上がる麦ワラ、ポーンとはねる青竹の音、火炎に赤く映える人々の顔など、懐かしい思い出です。

写真は、40年ぶりに行なわれた坂田の虫送り



【虫逐いの図】 江戸時代の虫送り風景。村中の人々が、手に手に松明をかざし、ホラ貝や鉦・太鼓を鳴らし田圃をめぐる、村境の水辺まで害虫を誘い駆除しました。稲作の中心とした、日本の近世農村では、大切な農耕儀礼のひとつでした。（伊藤一男）